

## 書 評

### 『雅楽入門』 増本伎共子著

東京：音楽之友社 2000年 257頁 1800円

呉 国偉

増本伎共子の『雅楽入門』は、音楽之友社から出版されている「音楽選書」シリーズの一冊である。既に出版されている「音楽選書」の内容を見ると、初心者向けの本は少なくない。寺西春雄の『音楽史のすすめ』（1983）、山田庄一の『歌舞伎音楽入門』（1986）、三浦裕子の『能・狂言の音楽入門』（1998）、金澤正剛の『古楽のすすめ』（1998）などは、それぞれの音楽分野に対する入門書と言ってよい。『雅楽入門』もその書名の通り、「音楽選書」シリーズにおける入門書の一冊である。

第一章「雅楽の予備知識」及び第二章「歴史のあらまし」は、雅楽の知識をほとんど持っていない読者に対する紹介的な部分である。第一章は単に雅楽の分類及び楽器の紹介だけではなく、楽器の役割も簡単に説明している。例えば雅楽の弦楽器（楽箏・琵琶）はいわゆる「リズム・メーカー」の役割を持ち、主旋律を演奏しないこと等を指摘する。

第二章は、五世紀から現在までの雅楽の発展を概括的に述べている。この章の分量は20ページ程度であるが、雅楽という名称の由来、雅楽寮の成立、御遊の登場、明治撰定譜の作成、宮内庁式部職楽部の形成にまで言及している。

第三章「楽器について」は最も長い章で、楽器の構造を詳しく説明する上に、各種類の楽器における特色も提示する。箏の塩梅や笙の合竹などの演奏特徴を、初心者にもわかるように、五線譜を用いて解説している。なお、雅楽の楽器はそれぞれ独特の楽譜を持つため、雅楽の記譜法もこの章で同時に紹介されている。

第四章「雅楽の各種目」では、雅楽におけるいろいろなジャンルについて解説している。現在、雅楽は「国風歌舞」、「歌い物」及び「大陸伝来の音楽」に分類されることが多いが、増本氏は雅楽演奏の様式に基づいて、雅楽を「管弦」、「舞楽」及び「上代歌舞（国風歌舞）」に分けている。「歌い物」は「管弦」の部分で説明されることになる。個人的には従来の分類法の方がよいと思うが、初めて雅楽に触れる読者を対象とした入門書なら、「管弦」及び「舞楽」の分類のほうが適当である。本を読んでから実際に読者がパフォーマンスを見に行くとすれば、やはり最初に「管弦」及び「舞楽」についての知識を与えたほうがよい。

「種々の音楽的仕組み」と題された最終章は技術的な説明が多く、調子及び拍子の説明を中心として、様々な内容が含まれている。この章は、単に読者に雅楽の基礎知識を伝えるだ

けではなく、雅楽用語を西洋音楽の用語と混同しないで正しく理解させることが目的だと思われる。それは本章の冒頭で「現代の日本人が・・・西洋音楽の理論を基準として雅楽の音楽仕組みを判断してしまうことがある」（195 ページ）と指摘し、「この章を読まれるにあたり、平常の西洋音楽的知識や常識をかなぐり捨て、フレキシブルな感性で各節に出てくる解説に接していただきたい」（195 ページ）という著者の希望が提示されているからである。たとえば雅楽でよく使われる「調子」及び「拍子」という用語は、西洋音楽の理論と混同しないように、この章で詳しく解釈されている。

『雅楽入門』は増本氏が初めて著した雅楽の概説書ではない。1968 年に出版された『雅楽 — 伝統音楽への新しいアプローチ』（日本：音楽之友社、1968）が氏の最初の雅楽概説書である。しかし『雅楽 — 伝統音楽への新しいアプローチ』は技術的な説明が多く、雅楽の専門家あるいは研究者を目指している読者によりふさわしい。『雅楽入門』も技術的な説明は少なくないが、非常に難しい理論や演奏技術にはあまり触れていない。研究者を目指そうとする読者も、最初に『雅楽入門』を読み、続いて『雅楽 — 伝統音楽への新しいアプローチ』に進むとよいだろう。

全体的な内容を概観すると、楽器や演奏技術の説明に偏りがちな印象がある。例えば第三章「楽器について」は最も長く、全体の三分の一を占めている。雅楽の楽器を紹介する必要はもちろんあろうが、説明が長すぎると、他の内容は相対的に不足しているように感じやすい。特に雅楽の舞楽でよく使われる装束や面などの説明がやや少ない。この本が主として音楽について取り扱っていることは理解できるが、雅楽の装束は、雅楽パフォーマンス（特に舞楽）では不可欠の要素である。

この本は、西洋音楽の五線譜と用語で雅楽を説明しているところに特徴がある。五線譜で楽器の音や音程を説明することがかなり多く、各楽器における特別な演奏方法も五線譜で解説することが少なくない。さらに西洋音楽理論の用語も時々用いられる。ヘテロフォニック、ポルタメント、オスティナート、トレモロ等の技術的な用語がしばしば出てくる。確かに五線譜や西洋音楽の用語で雅楽の音楽を説明すれば、西洋音楽の知識をある程度持っている読者にとっては便利かもしれないが、西洋音楽の知識をあまり持っていない読者にとっては逆に読みにくくなるだろう。著者は「西洋音楽の理論を基準として雅楽の音楽的仕組みを判断」してはいけないという意見を提唱しているにもかかわらず、西洋音楽用語を多数用いるのはやや矛盾ではないかと考える。もっとも西洋音楽用語や五線譜を全く使用しないで雅楽の音楽を完璧に説明することは無理だと筆者も思うが、難しい譜例及び用語を避ければいいのではないだろうか。